

# おしゃれ童子

太宰治

青空文庫



子供のころから、お洒落<sup>しゃれ</sup>のようありました。小学校、毎年三月の修業式のときには必ず右総代として校長から賞品をいただくのであるが、その賞品を壇上の校長から手渡してもらおうと、壇の下から両手を差し出す。厳肅な瞬間である。その際、この子は何よりも、自分の差し出す両腕の恰好<sup>かっこう</sup>に、おのれの注意力の全部を集めているのです。紺の着物の下に純白のフランネルのシャツを着ているのですが、そのシャツが着物の袖<sup>そで</sup>ぐちから、一寸ばかり覗<sup>のぞ</sup>き出て、シャツの白さが眼にしみて、いかにも自身が天使のように純潔に思われ、ひとり、うつとり心醉してしまったのでした。修業式のまえの晩、袴<sup>はかま</sup>と晴着と、それから仕立おろしの白いフランネルのシャツとを、枕もとに並べて置いて寝て、なかなか眠れず、二度も三度も枕からそつと頭をもたげては、枕もとの品<sup>しなじな</sup>品を見ました。まだ、そのころはランプゆえ部屋は薄暗いものでしたが、それでもフランネルのシャツは、純白に光つて、燃えているようでした。一夜明けて修業式の朝、起きて素早くシャツを着込み、あるときは、年とった女中に内緒<sup>ないしよ</sup>にたのんで、シャツの袖口のボタンを、更に一つずつ多く縫いつけさせたこともありました。賞品をもらうときシャツの袖がちらと出て、貝のボタンが三つも四つも、きらきら光り輝くように企てたのでした。家を出て、学校へ行く

途々みちみちも、こつそり両腕を前方へ差し出し、賞品をもらう真似をして、シャツの袖が、あまり多くもなく、少くもなく、ちょうどいい工合ぐあいに出るかどうか、なんどもなんども下検分してみるのでした。

誰にも知られぬ、このような侘わびしいおしゃれは、年一年と工夫に富み、村の小学校を卒業して馬車にゆられ汽車に乗り十里はなれた県庁所在地の小都会へ、中学校の入学試験を受けるために出掛けたときの、そのときの少年の服装は、あわれに珍妙なものであります。白いフランネルのシャツは、よっぽど気に入っていたものとみて、やはり、そのときも着ていました。しかも、こんどのシャツには蝶々はねの翅のような大きい襟えりがついていて、その襟を、夏の開襟かいきんシャツの襟を背広の上衣の襟の外側に出してかぶせていると、そつくり同じ様式で、着物の襟の外側にひっぱり出し、着物の襟に覆いかぶせているのです。なんだか、よだれ掛けのようにも見えます。でも、少年は悲しく緊張して、その風俗が、そつくり貴公子のように見えるだろうと思つていたのです。久留米縫くるめがすりに、白っぽい縞しまの、短い袴をはいて、それから長い靴下、編上のピカピカ光る黒い靴。それからマント。父はすでに歿し、母は病身ゆえ、少年の身のまわり一切は、やさしい嫂あによめの心づくしでした。少年は、嫂に怜憐に甘えて、むりやりシャツの襟を大きくしてもらつて、嫂が笑うと本氣

に怒り、少年の美学が誰にも解せられぬことを涙が出るほど口惜しく思うのでした。「瀟洒<sup>ようしや</sup>、典雅。」少年の美学の一切は、それに尽きていました。いやいや、生きることのすべて、人生の目的全部がそれに尽きていました。

マントは、わざとボタンを掛けず、小さい肩から今にも滑り落ちるように、あやうく羽織つて、そうしてそれを小粋<sup>こいき</sup>な業だと信じていました。どこから、そんなことを覚えたのでしょうか。おしゃれの本能というものは、手本がなくても、おのずから発明するものかも知れません。

ほとんど生れてはじめて都會らしい都會に足を踏みこむのでしたから、少年にとつては一世一代の凝<sup>こ</sup>つた身なりであつたわけです。興奮のあまり、その本州北端の一小都會に着いたとたんに、少年の言葉つきまで一変してしまつて、いたほどでした。かねて少年雑誌で習い覚えてあつた東京弁を使いました。けれども宿に落ちつき、その宿の女中たちの言葉を聞くと、ここもやっぱり少年の生れ故郷と全く同じ、津軽弁でありましたので、少年はすこし拍子抜けがしました。生れ故郷と、その小都會とは、十里も離れていないのでした。中学校へはいつてからは、校規のきびしい学校でしたので、おしゃれも仲々むずかしく、やけくなつて、ズボンの寝押しも怠り、靴も磨かず、胴<sup>どうらん</sup>乱をだらんとさげて、

わざと猫背になつて歩きました。そのときの猫背が癖になつて、十五年のちの、いまになつても、なおりません。あのころは、おしゃれの暗黒時代と言えましよう。

その小都会から更に十里はなれた或る城下まちの高等学校にはいつてからは、少年のお洒落も、のびのびと発展いたしました。発展しすぎて、やはり珍妙なものになりました。マントを三種類つくりました。一枚のマントは、<sup>エビブルウ</sup>海軍紺のセル地で、<sup>つりがね</sup>吊鐘マントがありました。引きずるほど、長く造らせました。少年もそのころは、背丈もひよろひよろ伸びて五尺七寸ちかくになつていましたので、そのマントは、悪魔の翼のようで、頗る効果がありました。このマントを着るときには、帽子を被りませんでした。魔法使いに、白線ついた制帽は不似合いと思つたのかも知れません。「オペラの怪人」という綽名を友人達から貰つて、顔をしかめ、けれども内心まんざらでもないのでした。もう一枚のマントはプリンス・オヴ・ウエルスの、海軍将校としてのあの御姿を美しいと思って、あれをお手本にして造らせました。ところどころに少年の独創も加味されていました。第一に、襟です。大きい広い襟でした。どういうわけか広い襟を好んだようです。その襟には黒のビロオドを張りました。胸はダブルの、金ボタンを七つずつ、きつちり並べて附けました。ボタンの列の終つたところで、きゅつと細く胴を締めて、それから裾が、ぱつとひらいて短

く、そこのリズムが至極軽妙を必要とするので、洋服屋に三度も縫い直しを命じました。袖も細めに、袖口には、小さい金ボタンを四つずつ縦に並べて附けさせました。黒の、やや厚いラシャ地でした。これを冬の外套がいとうとして用いました。この外套には、白線の制帽も似合つて、まさしく英國の海軍将校のように見えるだろうと、すこし自信もあつたようです。白のカシミヤの手袋を用い、厳寒の候には、白い絹のショオルをぐるぐる頸くびに巻きつけました。凍え死すとも、厚ぼつたい毛糸の類は用いぬ覺悟の様でした。けれども、この外套は、友だちに笑われました。大きい襟を指さして、よだれかけみたいだね、失敗だね、大黒様だいこくさまみたいだね、と言つて大笑いした友人がひとりあつたのでした。また、やあ君か、おまわりさんかと思った、と他意なく驚く友人もありました。北方の海軍士官は、情無く思いました。やがて、その外套を止しました。さらに一枚、造りました。こんどは、黒のラシャ地を敬遠して、コバルト色のセル地を選び、それでもつて再び海軍士官の外套を試みました。乾坤けんこん一擲いつてきの意氣でありました。襟は、ぐつと小さく、全体を更に細めに華奢きやしゃに、胴のくびれは痛いほど、きゅつと締めて、その外套を着るときには、少年はひそかにシャツを一枚脱がなければならなかつたのでした。この外套に対しては、誰もなんとも言いませんでした。友人たちも笑わず、ただ、へんに真面目なよそよそしい顔にな

つて、そうしてすぐ顔をそむけました。少年も、その輝くほどの外套を着ながら、流石に孤独寂寥<sup>せきりょう</sup>の感に堪えかね、泣きべそかいてしまいました。お洒落ではあつても、心は弱い少年だつたのです。とうとうその苦心の外套をも廃止して、中学時代からのボロボロのマントを、頭からすっぽりかぶつて、喫茶店へ葡萄酒<sup>ぶどうしゅ</sup>飲みに出かけたりするようになりました。

喫茶店で、葡萄酒飲んでいるうちには、よかつたのですが、そのうちに割烹<sup>かっぽう</sup>店へ、のこのこはいつていつて芸者と一緒に、ごはんを食べることなど覚えたのです。少年は、それを別段、わるいこととも思いませんでした。粹な、やくざなふるまいは、つねに最も高尚な趣味であると信じていました。城下まちの、古い静かな割烹店へ、二度、三度、ごはんを食べに行つているうちに、少年のお洒落の本能はまたもむつくり頭をもたげ、こんどは、それこそ大変なことになりました。芝居で見た「め組の喧嘩<sup>けんか</sup>」の鳶<sup>とび</sup>の者の服装して、割烹店の奥庭に面したお座敷で大あぐらかき、おう、ねえさん、きょうはめつぼう、きれえじやねえか、などと言つてみたく、ワクワクしながら、その服装の準備にとりかかりました。紺<sup>こん</sup>の腹掛。あれは、すぐ手にはいりました。あの腹掛のドンブリに、古風な財布をいれて、こう懷<sup>ふところ</sup>手して歩くと、いっぱしの、やくざに見えます。角帯も買いました。締め上げ

ると、きゅつと鳴る博多の帶です。唐桟の單衣を一まい呉服屋さんにたのんで、こしらえてもらいました。鳶の者だか、ばくち打ちだか、お店ものだか、わけのわからぬ服装になつてしましました。統一が無いのです。とにかく、芝居に出て来る人物の印象を与えるような服装だつたら、少年はそれで満足なのでした。初夏のころで、少年は素足に麻裏草ぞ履をはきました。そこまでは、よかつたのですが、ふと少年は妙なことを考えました。それは股引に就いてありました。紺の木綿(もめん)のピツチリした長股引を、芝居の鳶の者が、はいているようですけれど、あれを欲しいと思いました。ひよつとこめ、と言つて、ぱつと裾をさばいて、くるりと尻をまくる。あのときに紺の股引が眼にしみるほど引き立ちます。さるまた一つでは、いけません。少年は、その股引を買い求めようと、城下まち端から端まで走り廻りました。どこにも無いのです。あのね、ほら、左官屋さんなんか、はいているじゃないか、ぴちつとした紺の股引き、あんなの無いかしら、ね、と懸命に説明して呉服屋さん、足袋屋さん(たびや)に聞いて歩いたのですが、さあ、あれは、いま、と店の人たち笑いながら首を振るのでした。もう、だいぶ暑いころで、少年は、汗だくで捜し廻り、とうとう或る店の主人から、それは、うちにはございませぬが、横丁まがると消防のもの専門の家がありますから、そこへ行つてお聞きになると、ひよつとしたら、わかるかも知れ

ません、といふこと教えられ、なるほど消防とは気がつかなかつた、鳶の者と言えば、火消しのことで、いまで言えば消防だ、なるほど道理だ、と勢い附いて、その教えられた横丁の店に飛び込みました。店には大小の消火ポンプが並べられてありました。まとい纏もあります。なんだか心細くなつて、それでも勇気を鼓舞して、股引ありますか、と尋ねたら、あります、と即座に答えて持つて来たものは、紺の木綿の股引には、ちがい無いけれども、股引の両外側に太く消防のしるしの赤線が縦にずんと引かれています。さすが流石にそれを歩いて歩く勇気も無く、少年は淋しく股引をあきらめるより他なかつたのです。

おのれの服装が理想どおりにならないと、きっと、やけくそになる悪癖を、この少年は持つっていました。希望どおり紺の股引を求めることが、できなくなつて、少年の小粋の服装も目立つて、いけなくなりました。紺の腹掛、唐桟の单衣に角帯、麻裏草履、そのような服装をしていながら、白線の制帽をかぶつて、まちを歩いたのは、一たい、どういう美学が教えた業でしょう。そんな異様の風俗のものは、どんな芝居にだつて出て来ません。たしかに少年は、やけくそになつてゐるとしか思えません。カシミヤの白手袋を、再び用いました。唐桟、角帯、紺の腹掛、白線の制帽、白手袋、もはや收拾つかないごたごたのまんかんしょく満艦飾です。そんな不思議な時代が、人間一生のあいだに、一時は在るものではない

でしようか。なんだか、まるで夢中なのです。持ち物全部を身につければ、気がすまぬのです。カシミヤの白手袋が破れて、新しいのを買おうとしても、カシミヤのは、仲々無いので、しまいには、生地は、なんであつても白手袋でさえあればという意味で、軍手になりました。兵隊さんの厚ぼつたい熊の掌のように大きい白手袋であります。なにもかも、滅茶滅茶でした。少年は、そのような異様の風態で、割烹店へ行き、泉鏡花氏の小説で習い覚えた地口じぐちを、一生懸命に、何度も繰りかえして言つていました。女など眼中になかつたのです。ただ、おのれのロマンチックな姿態だけが、問題であつたのです。

やがて夢から覚めました。左翼思想が、そのころの学生を興奮させ、学生たちの顔が颶さつと蒼白になるほど緊張していました。少年は上京して大学へはいり、けれども学校の講義には、一度も出席せず、雨の日も、お天気の日も、色のきめたレインコート着て、ゴム長靴はいて、何やら街頭をうろうろしていました。お洒落の暗黒時代が、それから永いことつづきました。そうして、間もなく少年は、左翼思想をさえ裏切りました。卑劣漢の焼印を、自分で自分の額ひたいに押したのでした。お洒落の暗黒時代というよりは、心の暗黒時代が、十年後のいまに至るまで、つづいています。少年も、もう、いまでは鬚の剃り跡の青い大人になつて、デカダン小説と人に曲解されている、けれども彼自身は、決してそうで

はない信じて悲しい小説を書いて、細々と世を渡つて居ります。昨年まことに恋人が、できて、時々逢いに行くのに、ふつと昔のお洒落の本能が、よみがえり、けれども今となつては、あの、やさしい嫂にたのむことも、できなくなつてゐるし、思うようにお金使つて服装ととのえるなぞ、とても不可能なことなのでした。普段着いちまい在るきりで、他には、足袋の片一方さえ無い仕末でした。よほど落ちぶれて、困窮しているものと見えます。もともと、お洒落な子だつたのですし、洗いざらしの浴衣に、千切れた兵古帶へこおびぐるぐる巻きにして恋人に逢うくらいだつたら、死んだほうがいいと思いました。さんざ思い迷つて、決意しました。借衣であります。お金借りるときよりも、着物を借りる時のはうが、十倍くるしいものであること、ご存じですか。顔から火が出るという言葉がありますけれど、実感であります。それに、着物ばかりか、兵古帶も、下駄も借りなければ、いけなかつたのです。そうして、恋人を欺くのです。どんなに落ちぶれても、ロマンスの世界にはいると、彼のお洒落の本能が、むつくり頭を持ち上げて、彼の瘦せひからびた胸をワクワクさせる様であります。彼のような男は、七十歳になつても、八十歳になつても、やはり派手な格子縞こうしじまのハンチングなど、かぶりたがるのではないでしようか。外面の瀧洒と典雅だけを現世の唯一の「いのち」として、ひそかに信仰しつづけるのではないでし

ようか。昨年、彼が借衣までして恋人に逢いに行つたという、そのときの彼の自嘲の川柳を二つ三つ左記して、この恐るべきお洒落童子の、ほんのあらましの短い紹介文を結ぶことに致しましよう。落人の借衣すゞしく似合ひけり。この柄は、このごろ流行はやりと借衣言い。その袖を放せと借衣あわてけり。借衣すれば、人みな借衣に見ゆる哉。かな。味わうと、あわれな狂句です。



## 青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年10月26日公開

2005年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# おしゃれ童子

## 太宰治

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>